1 May 2020

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan

Newsletter No. 19

文化研究の意義　中島俊郎

オックスフォード大学のコーパス･クリスティ･カレッジで歴史家キース･トマス先生の指導を受けていたとき、先生は何のために文化研究をするのか、と私に質された。即答できずに黙っている私に向って、先生は「教師締め出し」という近代イングランドの学校で習慣化していた学生の行動について語りはじめた。*OED* の定義に従えば、「教師締め出し」とは、「生徒による反乱の一形式で、教室もしくは学舎から教師を締め出して、生徒たちの要求が受け容れられるまで立ち入れさせないこと」とある。多くは生徒たちが教師側に授業放棄を要求して、数日の休暇を獲得した。先生は 16 世紀に起こり 19 世紀まで続いたこの習慣の諸相を逸話も交えながら興味深く話して下さった。そして、後日、この習慣をテーマにした論文を下さったが、論文のなかにはテーマとからめて文化研究の意義が説かれていた。すなわち過去を過去のために研究するのではなく、過去と現代を相対化して考えるひとつの文化研究の道程が示唆されていたのである―「近代イングランドの学校において秩序と無秩序が交互にくりかえされていたことなど、もしかするとそれ自体は取るに足らないことかもしれない。だが、それは学校を超えた、より大きな社会の周期的な変動にぴったりと歩調をあわせて起こっている。しかもストライキや座り込みという、現代の流儀における手段の原型と思われるものが、教師締め出しという行為のなかに存在していたのである」と。すでに消滅した過去の習慣がもつ今日的な意義が照射され、今日において同じかたちでは表出されていないにせよ、依然として未解決な問題を考えるうえでの参照枠として有効であることが示されていたのである。つまり過去の事象から現代の問題を照らし、認識し、未来を予見するところに文化研究の意義があるのではあるまいか。

では試みに、ヴィクトリア朝と現代を往還できるひとつの「病」をモデルケースにとりあげ文化研究の在り方を考えてみよう。コレラはヴィクトリア朝イングランドが体験したことのない新しい「病」であった。ヴィクトリア朝に起きたコレラ禍の記録を読めば、今日、世界規模で広がっている新型コロナウィルス感染症との共通点に瞠目せざるをえない。作家イライザ･クック（1818-89）は自ら編集していた雑誌に、生活に影響を与える強力な媒体として福音活動をする「ロンドン･シティ･ミッション」、「ディケンズの小説」、そして「コレラ」をあげている。

旅する人間と同じように、コレラはゆっくりと街から街へ移りゆき、人々が密集する商業地にまず侵入していく。未感染の地では港町、国境、辺境から主要道路を通り大都市へ到る。コレラはある一面、社会的な病であるという。情け容赦なく貧困者を襲い、その劣悪な生活環境のなかで繁殖し、大都市へ侵略すれば、たちまちのうちに社会不安をかきたて、行政機能の不全ぶりをあらわにしてしまう。これまで見えていなかった政治、社会の欠陥が露呈されると同時に、人々は疑心暗鬼にかられてしまい、誹謗、中傷、噂が行き交い、暴力沙汰まで引き起こしてしまう。そしてヴィクトリア朝の人々が得体の知れない恐怖、不安にかられたのは、なぜコレラが発生し、いかに治療すればよいのか、またいつ頃に終息するのか、すべて闇のなかにあるという状況におかれていたためであっ

た。
　第一次選挙法改正法の法案がようやく成立した 1832 年、ロンドンはコレラ禍に初めて襲われた。1820 年、インドで発生したコレラはヨーロッパに迫ってきたが、カスピ海付近でとどまった。だが 1829 年、ベンガル周辺で起きたコレラ禍はヨーロッパを席巻したのち、1831 年夏、ウェア川河口の港町サンダーランドからロンドンへ伝播してきた。まずテムズ川南側にあるサザック、ライムハウス、ロザハイズといったドック地帯を脅かした。56 人に 1 人というバーモンジーの高い死亡率に見られるように南側は北側よりも死亡率が 3、4 倍も高かった。
　当初、新しい病はイングリシュ・コレラ（胃腸炎）と区別するため、コレラ病（Cholera Morbus）と呼称された。コレラに感染すると内臓障害が起こり、間断ない嘔吐と激しい下痢を繰り返し、筋肉の痙攣をきたした後、脈拍がおち無気力に陥り、低体温のなか朦朧とし、さらに脱水状態がつづき、時おかず死に到る。初めて見る恐ろしい病に人々は驚愕した。
　イギリスを襲った第一波はロンドンで 6,000 人、イギリス全土で 18,000 人（一説には 32,000 人）の犠牲者を出した。人口 28,285 人のエクセターでは 1,135 人が罹患し死者は 402 人あった。1832 年のほぼ 2 ヶ月間で 450 人もの孤児を生み出したビルストンで起きたコレラ禍の詳しい記録が残されている（http://bilstononline.co.uk/cholera.html）。国会では「解剖法」が審議されていたが、コレラ犠牲者の遺体が解剖に供されるという噂がたった。第二波は 1849 年 9 月に起り、ロンドンだけで 14,000 人の人々が死亡した。4 月 4,000 人、9 月 6,500 人の死者を加え、イギリス全体では 53,293 人もの犠牲者を数えた。ただし、下痢による死者数 18,887 人はこのなかに加算されていない。第三波は 1853-54 年にかけて起り、ロンドンで 10,000 人、イギリス全体で 20,097 人が亡くなり、第四波は 1865 年 7 月サザンプトンで起り、ポートランド、ドチェスターにも及び、ロンドンだけでも 5,548 人の死者を数え、イギリス全土では 14,378 人もの犠牲者があった。
　当初、コレラに感染した患者の治療にあたっては瘴気説がとられていたためまったく効を奏さなかった。ナイチンゲールも瘴気説の信奉者であった。不潔な場所、腐敗したものからもたらされる悪臭、悪い空気が病を起すと信じていたので、任にあたっていた聖トマス病院は充満する悪い空気を避けようと、換気に意をこらした。『看護婦の訓練と病人の看護』（1882）においても、病人の看護については換気にことのほか重点がおかれ、「昼夜を問わず、患者を寒さにさらすことなく、室内の空気を戸外と同様に新鮮に保つことが看護の第一原則である」と言明されている。ナイチンゲールはミドルエセックス病院でコレラ患者の治療にあたったが、患者に湿布薬を施し、湯たんぽで温め、ブランディ、アヘンでもって身体のうちから活性化させようとするものであった。試行錯誤の連続であったが回復は何ら見られなかった。ナイチンゲールと同じく瘴気説を信じた公衆衛生運動家エドウィン・チャドウィック（1800-90）は汚水をテムズ川に流す政策を支持したが、ロンドンの水道水を供給していたのはほかならないテムズ川であった。汚臭にまみれ鼻をつまむテムズの神を描いた諷刺画が『パンチ』に掲載された。
　コレラ病因学に重要な寄与をしたのは、ロンドンの医師ジョン・スノー（1813-58）である。麻酔医として高名であったスノーは、1853 年と 1857 年、ヴィクトリア女王の出産に際し、クロロフォルムを利用した。第一波のコレラ禍のとき、スノーはニューカッスル・アポン・タインでコレラ患者を診断している。ロンドンで第二波を経験し、1849 年、『コレラ感染形態論』という 30 ページばかりの小冊子を発行した。そして第三波が襲ったとき、開業していたソーホー地域で飲料水に関する組織的な調査を開始した。ロンドン南部におけるコレラによる死亡状況を調べたのである。そこでは数社の民間会社により水が供給されており、テムズ川から水を採っていた。各地域におけるコレラ死亡者数と水質汚染との因果関係が調査された。1854 年 8 月、ソーホーで下痢をともなう重篤な赤子の患者が出た。取り乱した母親は汚れたおしめを洗い、その洗濯した汚水を自宅地下にある汚水溜めに流した。その汚水溜めは街路下をはしる排水路とつながっていた。だが、赤子は幼児性下痢と誤診されてしまう。付近の排水路、井戸、水を汲み上げるポンプまでことごとく検査されたが、何ら問題はなかった。だが、スノーは疑念をすてきれず、精査したところレンガに亀裂があることを見逃さなかった。コレラに感染した排泄物が排水路から井戸へ浸透していたことを突き止めたのである。スノーは急いでこの結果をセント・ジェームス教区委員会に報告し、井戸からの採水が中止されたところ、コレラ感染は激減したという。

スノーの説を補強する事実がのこっている。ソーホーに居住していた一家がハムステッドへ引越していった。ソーホーの井戸水を愛飲していた母親のため、息子たちはその水をハムステッドまでいつも運んでやっていた。1854 年、ハムステッドではコレラ禍が鎮まったが、その母親のみが犠牲者となった。

1855 年、スノーは調査結果を 1849 年版に増補し、コレラの原因と感染に関する決定的な見解を発表した。コレラは経口により体内に入り、コレラ患者の排泄物から感染するものであった。さらにコレラは人間から人間へ、汚れた手、菌が付着した食品、水を通じて感染することが判明したのである。スノーとは別に疫学者ウィリアム･バッド（1811-80）も同時期の 1849 年に『真性コレラ―感染と防止』を発表し、スノーと同じ結論をえていたのである。ただ、スノーやバッドの正しさが証明されたのは、ロベルト･コッホがコレラ菌を発見する 1883 年までまたねばならなかった。

とはいえコレラ感染防止のうえでスノーたちの医学的な貢献を余りにも誇大視してはならないであろう。感染者を地図上に記載し、コレラの感染地域を図示した地図は感染状況を一目で知らしめた。水供給の改善、廃棄物、汚物の除去、清潔な家屋などを推奨したチャドウィック、サウスウッド･スミス、ジェイムズ･ケイなどの衛生上の提言、実践も忘れてはならない。コレラ禍は行政面にも影響を与え、救貧院の管理、総合保険局、戸籍庁などの設置で中央統制化を促した。

ヴィクトリア朝イングランドではコレラ禍が広がり、その病原菌が同定されるまで半世紀もの歳月がかかっている。新型コロナ感染症に対して有効な治療法がなく感染防止としては人との接触を避ける方策しかない現在、ヴィクトリア朝におけるコレラ禍にまつわる文化変容は、どのような教訓を私たちに与えてくれるのであろうか。

ヴィクトリア朝のパンデミックと細菌兵器の物語　橋本順光

コレラ菌をばらまけば全滅するはず、そんな物騒な記事が 1888 年の英国各紙に頻出している。オーストラリアで増えすぎた英国由来のウサギの話だ。1887 年、お手上げのニューサウスウェールズ州政府が懸賞金付きで打開策を応募した。そこへパストゥールがニワトリ・コレラの細菌接種を提案したのだ。1887 年 11 月 29 日付『ル・タン』紙掲載の書簡は、1888 年 2 月 25 日付『タイムズ』紙で紹介され、各紙が続報を伝えた。パストゥールの弟子が試験管を持ってオーストラリアに向かって島で実験を行うも、結果は思わしくなく、結局、案は採用されなかった。ちょうど牛乳などの低温殺菌法が、その名にちなんでパスチャライズと命名された頃である。すでにパストゥールは細菌を弱毒化して、1880 年にニワトリ・コレラのワクチンを開発していた。弱毒化せずに接種すれば駆除できるはずというわけだ。

図 1

当時、ウサギ同様にオーストラリアの入植者をおびやかすとみなされていたのが、中国系の移民だった。低賃金でも良しとするゆえに、彼らは憎悪と偏見の対象となっていた。例えば『パンチ』によく似た『ブレトゥン』(*Bulletin*)誌掲載の悪名高い漫画「モンゴリアン・オクトパス」(1886 年 8 月 21 日号)。描いたのは英国リーズ生まれのフィル・メイ(Phil May)である。「低賃金労働」や「チフス」と書かれた触手で英国系住民を締め上げる巨大なタコは、顔が中国系の男性であり、彼らが海から上陸してくる異物としてとらえられていたことを示す。看板画家のメイは、招かれざる客としてウサギと中国系移民を並べた作品も描いた(図１)。「共に仕事を求めてさすらうはめに」(1888 年 5 月 19 日号)で

は、追い返される中国系移民の一人が、同じく長居できないウサギに別れを惜しんでいる。両者を一掃したい思惑はあまりに露骨だ（このあたりの資料は Marguerite Mahood, *The Loaded Line: Australian Political Caricature, 1788-1901*, 1973 に教えられた）。

それゆえ、パストゥールの提案は細菌兵器の枠組みでとらえることができる。そもそも記録上、最初に細菌戦を発案したのはジェフリー・アマースト(Jeffery Amherst)とされる。フレンチ・インディアン戦争中の 1763 年、この英国の将軍は、天然痘で汚染された毛布を「インディアン」に贈るよう提案した。その実効性については Elizabeth A. Fenn の *Pox Americana: the Great Smallpox Epidemic of 1775-82* (2001)などに譲るとして、ここで注目したいのは、それが細菌学説と同時代に再発見されたことだ。アマースト書簡を発掘したのは米国の歴史家フランシス・パークマン(Francis Parkman)。彼の 1870 年刊行の改訂版『ポンティアックの陰謀』(*The Conspiracy of Pontiac*)が、この提案を世に広めた。ウィリアム・モリスが『ユートピアだより』(1890)で同じ逸話に触れているのも、パークマンの著作に端を発するといってよいだろう。

インドでコレラが流行した 1890 年代になると、細菌で汚染された毛布は、今度は逆に英国に脅威をもたらす感染源として喧伝されることとなる。大々的に論陣を張ったのは、BMJ こと『英国医学雑誌』を今なお続く一流誌に押し上げた編集長のアーネスト・ハート(Earnest Hart)だ（彼の活躍は小川眞里子『病原菌と国家ーヴィクトリア時代の衛生・科学・政治』 2016 を参照）。ハートは、「インドを本拠地とするアジア・コレラ」(Asiatic Cholera)が移民によってヨーロッパに侵入する可能性を強調し、特にメッカの井戸で巡礼者が浴びる水や「襤褸布」がコレラの流行を拡大すると警告した。この 1892 年 10 月号『19 世紀』誌掲載の論考は、いみじくも「コレラと我々の防護策」(Cholera, And Our Protection Against It)と題されている。「アジア・コレラ」という当時の通称にのっとり、ハートは暗黒の東洋と文明の西洋を対比し、アジアからの脅威を抑え込むのは「我々の帝国の責務」と記した。異教徒への偏見は明らかだ。1894 年 2 月 24 日号 BMJ 掲載の講演記事「コレラの苗床」(The Nurseries of Cholera)では、誤解たっぷりの井戸の様子が描かれている（図２）。

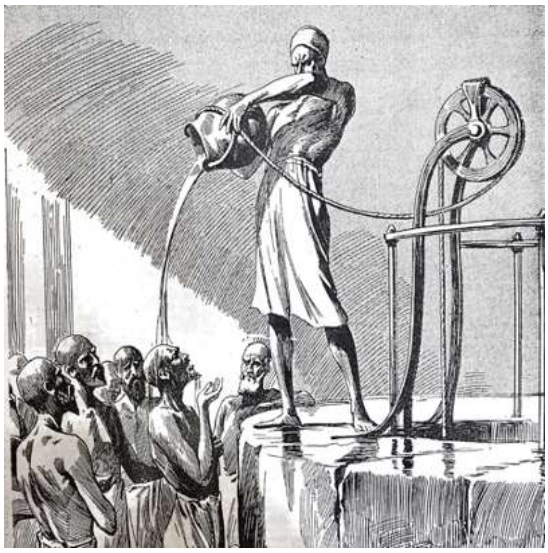

図 2

そんなハートの意図をことさらに誇張したのが、ホームズのモデルこと医師ジョセフ・ベルである。ベルは『シャーロック・ホームズの冒険』(1892)の書評で、「メッカの井戸にコレラ菌をばらまけば、巡礼者が運ぶ瓶詰の聖水で大陸全土が感染し、疫病の犠牲者がまとう襤褸布にキリスト教国の港は震撼するだろう」と記した。ハートの『19 世紀』誌から 2 か月後の『ブックマン』(1892 年 12 月号)誌上でのこと。アマーストの提案は諸刃の剣で、もし誰かが井戸にコレラ菌をばらまけば、容易にヨーロッパもコレラに悩まされるというのである。

ベルの発想になると、細菌テロそのものだ。実際、おそらく史上初めて細菌テロを扱った小説が誕生したのは、この 2 年後。H・G・ウェルズの短編「盗まれた細菌」(Stolen Bacillus, 1894)では、アナーキストが偽の紹介状をもって科学者の実験室に入り込み、「アジア・コレラ」について説明を聞いた後、その試験管を奪い去ってしまう。男は科学者に追い詰められるが、細菌を飲み干して不敵な笑みをうかべ、ウォータールー橋の雑踏で「わざと多くの通行人にぶつかるようにして」消えていく。もっともその細菌は、コレラ菌ではなかった。サルに「青い斑点」を生じさせる細菌を、つい科学者はきまぐれにもコレラと説明してしまったのだ。夫の異変に気付いて追いかけてきた妻に、ひょっとして犬猫に青い斑点ができるかもしれないと軽口を述べて、あっけなく小説は閉じられる。

たわいない短編だが、当時の読者は「青い斑点」に、患者の皮膚の色から「青い恐怖」(Blue Death)として恐れられたコレラの再来（例えば見市雅俊ほか『青い恐怖白い街ーコレラ流行と近代ヨーロッパ』1990 などを参照）を想起しただろう。科学者自身が試験管のコレラを水源にまくだけで大惨事だと興に乗って来客に語る場面は、ベルやパストゥールの陰画ともいうべき「マッドサイエンテ

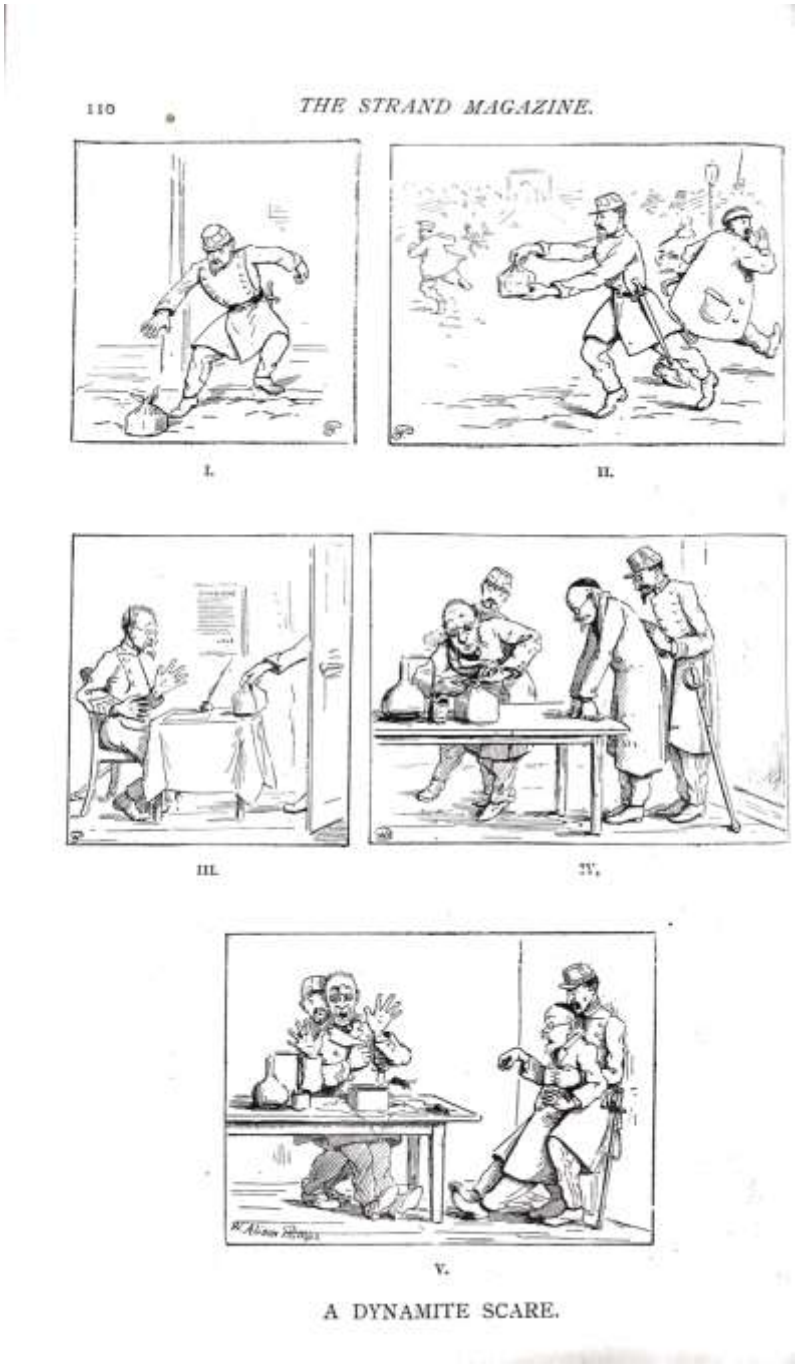

図 3

ィスト」と重なる。事実、この科学者のきまぐれに、悪意と狂気が加わるだけで、容易に大量虐殺が起こる危うさがここには書き込まれている。

無政府主義者たちの暗殺やテロ（未遂）が新聞を騒がせていた世相も無視できまい。例えば『ストランド・マガジン』1892 年 7 月号掲載の「ダイナマイトの恐怖」は、爆弾テロの仕業かと不審な箱を戦々恐々と開けるや、鼠が一匹飛び出すという素朴な漫画だが、日常がテロへの不安と隣り合わせなのを描く点で「盗まれた細菌」と同じ趣向だ（図３）。大山鳴動の絵解きながら、その鼠一匹で伝染病は広まりかねないのである。事実、当時の英国では、無政府主義も「アジア・コレラ」同様、欧州大陸という異国から襲来する流行病のように考えられていた。有名なグリニッジ天文台爆破未遂事件(1894)でフランス系のアナーキストが爆死したことをウェルズは念頭においており、男が「無政府主義万歳」(Vive l'Anarchie)と有名な符丁を叫ぶのはそのためだ。すでに小説では、ダグラス・フォーセット(Douglas Fawcett)の『無政府主義者ハートマン』(*Hartmann the Anarchist*, 1893)が話題となっていた。ドイツ系の名前のアナーキストが、巨大な飛行船を開発し、ロンドンを空爆して最後は自爆する話だが、その飛行船の名は、東方の蛮族王「アッティラ」だった（図４）。

こうした文脈を考えれば、「アジア・コレラ」やアナーキストという異国からの脅威を、ウェルズは「盗まれた細菌」で巧みに組み合わせたことがわかる。この延長でパストゥールの提案をそのまま参考にしたような小説まで書かれた。M・P・シール(Shiel)による『黄色い危機』(*The Yellow Danger*, 1898)は、日中連合軍がヨーロッパを征圧するものの、英国から伝染病に感染した捕虜を返されて全滅するという荒唐無稽な未来戦記である。興味深いのは同じ年に書かれたウェルズの『宇宙戦争』であろう。そこで登場人物の一人は、火星人の侵略になすすべもなく滅びようとする地球人を、ヨーロッパ系移民に滅ぼされた「タスマニア人」になぞらえている。一方、火星人は彼らには免疫のない未知の細菌のため突如として全滅してしまう。パストゥールの提案を思わせるが、ここでは入植者もまた未知の細菌によって絶滅する可能性が示唆されている。

なおパストゥールの提案は過去のものではない。オーストラリアでは、1950 年代以降、致死率の高い兎粘液腫などのウィルスが、何度も導入されている。宿主のウサギが全滅してはウィルスも生存できないため、結局、ウィルスが弱毒化して効果が薄れてしまうためである（詳しくは Brian

POURING DOWN LIQUID FIRE.

（ろ掛ぎ注へ上衛に三結二結は爆火の油鹽石）

図 4

Douglas Cooke, *Australia's War Against Rabbits*, 2014 を参照)。唐突ながら、ここで思い起こされるのは香港のジョン・ウー監督がオーストラリアを舞台に撮影した『ミッション：インポッシブル２』(2000)だ。とある科学者が致命的な伝染病ウィルスとワクチンの双方を開発し、争奪戦が始まるのだが、ウィルスが敵に渡るのを恐れた女性が、ウィルスを自分に注射してしまう。しかし、ワクチンで大儲けしたい敵の一味は彼女を強奪し、パンデミックを引き起こそうと、わざと繁華街の雑踏の中で彼女を解放する。字幕などでは翻訳されていないが、その捨台詞がふるっている。「お前はオーストラリア版チフスのメアリーとして歴史に名が残るだろうよ」というのだ。

「チフスのメアリー」(Typhoid Mary)ことメアリー・マローン(Mary Mallon)は、1907 年のアメリカで報告された無症状感染者で、いわばスーパー・スプレッダーの代名詞だ（金森修の『病魔という悪の物語—チフスのメアリー』2006 を参照)。アイルランド生まれの女性で労働者のメアリーは、「病魔」として糾弾するのには格好の標的だった。映画は『カルメン』を下敷きにするが、ヴィクトリア朝のパンデミック言説の遠い残響も聞き取れる。ついでにいえば『ミッション:インポッシブル/フォールアウト』(2018)は、カシミール地方に天然痘ウィルスをまくか核爆発を引き起こすかして、インドやパキスタン、それに中国の水源を汚染しようとするテロリストを描く。ここでもベルらの言説が、巧みに現代の娯楽へと組み替えられていることがうかがえよう。

ヴィクトリア朝の文化研究はそれ自体に価値があることはいうまでもない。その成果の一端は、世界中で愛好されるヴィクトリア朝の物語に着想を与えるなど、大いに社会に還元されている。「アジア・コレラ」やテロの物語が示すように、今日からすれば反動的ないし差別的な言説にしても、詳しく調べれば、現代にも再利用なり再生産されていることは明らかだ。実際、感染症の名に地名や人名を使わないよう WHO が勧告したのは、2015 年になってのことである。フォーセットの小説が 3 年後には山岸覚太郎により『空中軍艦』として翻案されたように(図４右)、日本との関りも極めて大きい（詳しくは横田順彌『近代日本奇想小説史』2011 を参照)。前述のハートは、漱石が翻訳した「催眠術」(1892)の著者として知られるが、日本美術の収集と研究でも著名であり、南方熊楠が愉快な逸話を書き残している。分野別に注目される人物を総合できるのも本学会の強みであろう。著作権が切れるなど電子化が進むのも、英国から離れて住む研究者には追い風かもしれない。今回引用した資料のほとんどは、British Newspaper Archive や Internet Archive に HathiTrust Digital

Library、それに Google Books や Project Gutenberg などで容易に読むことができる。
　19 世紀英国から幾分はみだす時代や地域を研究する私のような者は、ヴィクトリア朝文化研究に大いに助けられた。日本ヴィクトリア朝文化研究学会にはこれを機会に少しでもご恩返しできるよう、ますますの研究と発信を微力ながらお手伝いしたい。ここに雑駁ながら学恩の一端を紹介するとともに、改めて会員諸氏のご教導とご教示を仰ぐ次第である。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2019 年度総会

日時：2019 年 11 月 23 日（土）17 時 35 分～17 時 50 分
場所：近畿大学東大阪キャンパス　A 館 3 階 301 教室（司会　佐藤和哉事務局長）
議題
【報告事項】
１．2019 年度活動報告・活動予定
Ⅰ．運営委員会、役員会関係
　2019 年 8 月 3 日　第 1 回　運営委員会（日本女子大学）
　2019 年 11 月 22 日　理事会（近畿大学）
　2020 年 1 月　第 2 回　運営委員会（未定）

　2019 年 1 月 26 日 第 1 回　編集委員会（日本女子大学）
　2019 年 8 月 3 日　第 2 回　編集委員会（日本女子大学）

Ⅱ．学会誌、ニューズレター
　2019 年 5 月　*The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 18 発行
　2019 年 11 月　『ヴィクトリア朝文化研究』（*Studies in Victorian Culture*）第 17 号発行

Ⅲ．全国大会関係
　2019 年 11 月 23 日　第 19 回　全国大会開催（近畿大学）

Ⅳ．その他
　2019 年 5 月　第 20 回大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

　◎会員動向　対象期間：2018 年 4 月 1 日から 2019 年 3 月 31 日まで
　新規入会者　16 名　　退会者 17 名
　2019 年 3 月 31 日現在　会員 315 名（うち学生 19 名）

２．学会誌について
　上記の通り、発行された。

３．大会・企画委員会の活動について
　大石和欣大会・企画委員長より、大会・企画委員の各氏が 2020 年度大会の準備を進めると共にに、学会を活性化するための企画を計画中であることが、報告された。

４．学会企画事典の進捗状況について
　大石和欣編集委員より、事典の計画の進捗状況について報告された。

５．その他

特になし。

【審議事項】

1．2018 年度決算
資料に基づき報告され、了承された。

2．2019 年度予算案
資料に基づき報告され、了承された。

3．新体制について
資料に基づき、2020 年度からの役員が報告され、了承された。なお、資料への補足として橋本順光氏が副会長となることが併せて報告され、了承された。

4．規約の改定について
事務局が変更になることに伴う規約の改定について報告され、了承された。

5．2020 年度の大会について
第 20 回大会は、2020 年 11 月 28 日（土）に東京大学駒場キャンパスにて開かれる予定であることが報告され、了承された。

6．その他
特になし。

2018 年度決算報告書（2018.4.1-2019.3.31）

【収入の部】　　単位：円

項　目	金　額	備　　考
前年度繰越金	5,531,770	
利子	31	ゆうちょ銀行
出展料	15,000	3 社
学会費	1,720,000	
学会誌販売	1,000	非会員向け
合　計	7,267,801	

【支出の部】

項　目	金　額	備　　考
通信費	71,691	郵便、手数料等
大会経費	282,334	大会会場費、プログラム・ポスター製作、郵送費、アルバイト料など（講演謝礼含む）
懇親会費	-22,713	会場使用料、飲食代
学会誌作成・郵送費	733,650	
学会誌用図書費	100,169	
振込手数料	4,428	謝礼、交通費等振込時の手数料
消耗品費	15,177	文具等

役員会費	0	理事会会場費
役員交通費	579,982	理事会・事典編集委員会
非会員謝礼・交通費	110,000	学会誌執筆謝礼（6 名）
事務局員謝礼	240,000	月 10, 000 円×2 名
事典編集書記御礼	60,000	2018 年度より新設
その他	64,277	サーバー使用料・読書会講師費用等
合　計	2,238,995	
次年度繰越金	5,028,806	

以上の通りご報告いたします。

2019 年 7 月 3 日　　会計　佐藤和哉

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2019 年 7 月 27 日　　会計監査　松村伸一

2018 年度懇親会決算報告書（2018.11.17）

【収入の部】　　単位：円

項　目	金　額	備　　考
懇親会費事前振り込み	190,000	5, 000 円×36 名+2000 円×5 名
懇親会費当日支払い	0	
合　計	190,000	

【支出の部】

項　目	金　額	備　　考
飲食代等	155,822	
持込み	10,415	
雑費	1,050	
合　計	167,287	

＊収入―支出	22,713	学会会計に繰り入れ

以上の通りご報告いたします。

2019 年 7 月 3 日　　会計　佐藤和哉

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2019 年 7 月 27 日　　会計監査　松村伸一

2019 年度予算案（2019.4.1-2020.3.31）

【収入の部】　　単位：円

項　目	金　額	備　考
前年度繰越金	5,028,806	
会費	1,814,000	一般会員 296 名、学生会員 19 名 （2019 年 3 月 31 日現在）
出展料	15,000	3 社
合　計	6,857,806	

【支出の部】

項　目	金　額	備　考
通信費	80,000	
大会経費	300,000	2018 年度　282, 334 円
NL 刊行費	0	2016 年度よりオンラインにしたため
懇親会費	80,000	2018 年度は学会からの支出はなかったが、2017 年度は約 85, 000 円
学会誌作成・郵送費	700,000	2018 年度　733, 650 円
学会誌図書費	90,000	書評用図書　2018 年度　100, 169 円
優秀論文賞	50,000	
振込手数料	5,000	学会費振込時の振込方法を変更したため
消耗品費	10,000	文具等　2018 年度　15, 000 円
役員会費	10,000	理事会、運営委員会、編集委員会（18 年度　0 円）
役員交通費	60,000	運営委員会、編集委員会（18 年度　59, 840 円）
事典編集委員会交通費	100,000	（18 年度　520, 142 円）
非会員謝礼、交通費等	50,000	2018 年度　100, 000 円（謝礼 9 名分、お一人だけ 20, 000 円）
事務員謝礼	300,000	
予備費	100,000	事典刊行に備え
合　計	1,935,000	

次年度繰越金	4,922,806	

合　計	6,857,806	

第 20 回大会のお知らせと研究発表の募集

第 20 回大会は、2020 年 11 月 28 日（土）に東京大学駒場キャンパスで開かれる予定です。第一シンポジウムの題目は「芸術のための芸術／世界のための芸術—開かれた唯美主義の形態」で、モデレーターは川端康雄氏（日本女子大学教授）、パネリストは、横山千晶氏（慶応義塾大学教授）、近藤存志氏（フェリス女学院大学教授）、加藤千晶氏（東京外国語大学非常勤講師）の予定です。また第二シンポジウムの題目は「ヴィクトリア朝の書簡」で、モデレーターは川崎明子氏（駒澤大学准教授）、パネリストは小宮彩加氏（明治大学教授）、君塚直隆氏（関東学院大学教授・非会員）の予定で、残る 1 名のパネリストは現在検討中です。

特別講演は見市雅俊氏（中央大学名誉教授・非会員）にお願いすることになっています。予定のテーマは「感染症」です。どうぞふるってご参加ください。

研究発表（発表時間 30 分、質疑応答 15 分）を希望する会員は、発表要旨（400 字）に略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送で事務局までお送りいただくか、あるいは添付ファイルで学会のメールアドレスまでお送りください。メールの場合、送信後 3 日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いします。**締め切りは 2020 年 7 月 4 日（土）必着です。**

なお今後の新型コロナウィルスの状況によっては、zoom による開催等の可能性を含め、上記計画に変更が生じる可能性があること、どうぞご了承ください。 9 月中旬頃までには、大会プログラムをお届けする予定です。

第 21 回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2021 年 11 月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 21 回全国大会（開催場所と日時は今年の 8 月に決定される予定です）における、シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ 2 時間 30 分程度（15 分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。**締め切りは 2020 年 12 月末日（木）必着**といたします。

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については、運営委員会（2021 年 1 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締め切り：2020 年 12 月末日（木）必着
2. 申請方法：様式は問いません。下記に示す申請書必要記載事項を記入して、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局までメールにてご提出ください。下記の「シンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書」（Excel 形式）を利用していただいても結構です。
（http://www.vssj.jp/conferences.html/からダウンロードしてお使いください）
3. 申請書必要記載事項
   ① シンポジウム・ラウンドテーブルのタイトル
   ② 趣旨（400 字程度）
   ③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
   ④ プログラム
   1)司会（氏名、所属）2）報告者（氏名、所属）3）各報告者の題目および報告要旨（200 字程度）4)タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度〔休憩含む〕に収まるように計画してください）
   ＊シンポジウム・ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。
4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
   〒610-0394　京田辺市多々羅都谷 1−3
   同志社大学グローバル・コミュニケーション学部　玉井史絵研究室内
   Tel:0774-65-7223
   E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com

編集後記

新しく日本ヴィクトリア朝文化研究学会会長、および副会長に就任された中島俊郎先生と橋本順光先生に玉稿をいただきました。ご寄稿くださった両先生に、心より御礼を申し上げます。新型コロナウイルスにまつわる諸事情から、発行が遅れたことを、心よりお詫び申し上げます。本号からニューズレターを担当させていただきます。不手際も多々あろうかと思いますが、どうぞよろしくご指導ください。（NL 担当　杉村醇子）

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1−3
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部
玉井史絵研究室内
ＴＥＬ：0774-65-7223
E-mail：victorianstudies.japan@gmail.com
発行日：2020 年 5 月 1 日